

ジャン・バニエの手紙 - 2008年11月、トロリーにて

親愛なる友人に皆様へ、

私の歳が80を越えたというので、元気であることを願い、祈ってくださるという葉書きやお手紙、メールや贈物、電話などなど（なかにはジャム入りの瓶もありました）をいただき、私は恐縮しており、また感謝いたしております。

皆様にはお分かりのことと存じますが、この手紙は、まとめて皆様に感謝する手紙となっております。

私といたしましては、皆さま方お一人おひとりに、またそれぞれの共同体に対して、個人的に御礼の手紙を書きたいと思うのですが、それが叶わないことは、皆様にも察していただけのものと存じます。

私は、-それほど深く隠れているわけでもありませんが-、この隠れた、穏やかな交わり
の雲に抱かれ、愛され、暖められ、強められているのを感じていると言わざるを得ません。
それは、まるで神が隠されていて、そして顕されているが確認できない雲のようなもので
す。

トロリーでの9月22日のお祝いは、愛や感謝や笑い、そして祈りの美しい花火のようでした。それは真っ赤に燃えて沈んで行く太陽のように静かでしたが、同時にブランコに乗ってビュンビュン揺らしている子どものように飛び跳ねたり、踊ったりしていました。

このように過ごした日々を、どのように表現すればいいのでしょうか。感謝の叫びしかありません。

私はカルカッタから戻ったばかりです。これはすごい体験でした。

135すべての共同体の代表が出席した今回の国際会議を、どのように説明すればいいのでしょうか。私たちの共同体が1970年以降、一生懸命奮闘し、成長し、そして花を咲かせてきたインドにおいて、このような国際会議を開くことは、大胆ではありましたが、とても現実的なものでありました。

ヒンズー教の巡礼を祝う何百万もの小さなランプが灯された町カルカッタの美しさと貧しさを私たちは目にして、触れることができました。

ラルシュにおいて私たちは、互いが出会うことの喜びを、共に祈ることの喜びを、そして成長と明日へのビジョンに耳を傾ける喜びを生きていました。

私たちの弱くて傷つきやすい兄弟姉妹に対して、もっと深くかかわるためです。そうすることで、彼らの声が聞き入れられ、そして彼らの価値が理解され、私たちの世界で大事にされるのです。そして真理や神、ラルシュや人々に対してのコミットメントに関する振り返りが始まるのです。

弱さを締めくくるために、私自身は 80 歳という年齢と隠居生活へ、地元のブラスバンドに率いられた長い行列で、送り出していただきました。そこには象が作ったという 9 つのホームがありました。そして最後に私は馬車に座っているカシヤピーター・デ・クルスといっしょに、しんがりを務めました。

それから、すべての人が踊り、歌って無秩序状態になりました。そして白檀の粉が雲のように、人々の上に振りまかれました。

ジャンークリストフとクリスティーヌは、傷つきやすい人々から成っている、壊れやすい共同体をととも上手に、しかも立派に、権力を誇示したがる世界にあっても神に対する信頼をもって、導いているのです。

彼らのことを神に感謝いたします。そしてラルシュを守り、導いてくださる神に感謝いたします。

金曜日に、私たちはカルカッタにある、一軒の家に巡礼いたしました。そこは 1946 年にカルカッタで発生した恐ろしい暴動を止めさせるために、マハトマ・ガンジーが断食したところでした。それは平和の、そして平和のための巡礼でした。

私はガンジーの人生や、敵をも愛する彼の力に心打たれました。すべての人は神の子どもなので、常に敵の中に「善」を見出し、「極悪人」そしてもっとも残酷な人のように思える人たちでさえも、変わることができると信じたのです。

ガンジーにとってこの愛は彼の中で湧き上がったパワーであり、私たち全員の中でも沸きあがるようにと呼ばれています。

カルカッタの後は、ルルドでした。世界中の「信仰と光」共同体から 200 人の代表者が一堂に会しました。その場に私は、わずか 2 日間しかいませんでした。

新しい規約が議決され、運営委員会の委員長にヘンリー・メイジャー氏が、そして国際コーディネーターにギスラン・ド・チェヌ氏が選ばれました。

世界中の共同体では命が満ちています。そして代表者たちには命が満ちていました。

愛のうちに、そして同じビジョンのうちに繋がっていると私が感じる、非常に大勢の人たちやマリー・エレンと共にいることは、大いなる喜びでした。

ですから私は「信仰と光」を守り、導いてくださる神に感謝いたしております。

皆様のうちの何人かは、前回の私のもっともらしくあれこれと書いた手紙のあとでも、私がまだ以前にも増してあちこちを歩き回っているのを見たり、聞いたりしているのを知って、ショックとまではいかなくとも、驚かれていることでしょうね。

これは、おとなしくしようとする思いや存在や祈りを消し去るものではありません。

でも見ていてください、12 月からおとなしくなりますから。

毎年、8 月、私はイエスと共にいるため、休息を取るため、読書するため、そして森の中を

歩くための静かな時間を取って、オーヴァルの修道院にいますが、以下の文章は、その時に書き始めたものです。

私は幸せで、神に祝福されていると感じているのだと言わざるを得ません。

私の状況は変化しています。以前、私にはたくさんのエネルギーがありましたが、今やそのようなエネルギーもほとんどありません。

私の足はすぐに疲れてしまいます。ゆっくりとしか歩けませんし、すぐに立ち止まり、座り込んで休憩します。勿論、早くベッドに入り、遅くまで寝ています。そしてまた、言うまでもなく、昼食の後は、お昼寝します。

以前の私なら、もっと元気よくお祈りしていましたし、ゴミサの間、必要な時に必要に応じてひざまずいたり、立ち上がったたりすることができました。

今や私は座ったままです。

会話においては、私は話されていることを理解しようと努めます。もはや小言を言ったり、最後の締めくくりの挨拶をする必要もなくなりました。

すべてのことがゆっくりとしたものとなって参りました。そしてやるべきことも少なくなり、ただ私には、座って、呼吸をし、見て、耳を傾けることができる時間があります。

2~3日前、私は巣の中にいる何匹かのツバメを見ました。可哀想に、彼らは狭苦しいそうにしていました。彼らの巣は、育ち盛りの青年ツバメたちにとっては、あまりにも小さなものでした。一匹のツバメが飛び立とうとしますが、すぐに戻ってきます。お母さんツバメでしょうか、それとも単なる訪問者なのでしょう。

ルカ福音書(7章18節~参照)では、私たちは、牢に入れられている洗礼者ヨハネが、ある時、苦悩と疑いの時を通過していくのを見ることができます。

彼の従兄弟であるイエスは、本当に来られるべき方メシアなのだろうか。そこで洗礼者ヨハネは、イエスに尋ねるために使者を送ります。「あなたは、まさにその方でいらっしゃるでしょうか。それとも私たちは他の方をお待ちしなくてははいけませんか。」

イエスはお答えになります。「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、貧しい人は福音を告げ知らされているとヨハネに伝えなさい。」

これがメシアはおられるというしるしであり、神の業のしるしであります。

私は、喜びと好奇心をもって、これらのツバメを見ていました。

以前、私がエネルギーいっぱいの際は、あまりにも小さいツバメの巣を楽しみながら、じっとツバメを観察するために、おそらく立ち止まったりしなかったでしょう。

ひとつの場所から次の場所へと移動しなければなりませんでしたから。多忙でした。

巣の壁からピーチク、パーチク鳴いている青年期のツバメの頭を見て、私はイエスのこと、そして食べ物や衣服、そして明日のことを思い悩まない空の鳥についてのイエスのお話し

を思い浮かべました。(マタイ福音書 6章 25節～)

今、私には時間があるおかげで、立ち止まり、観察し、被造物の美しさを喜べるのです。すべてのものがイエスの御手のうちにあるのです。

今、時折、私は自分の椅子に座り - 快適な椅子です - イエスの手の中に自分の手を置いて、イエスにはほほ笑みかけます。するとイエスは、私にはほほ笑みを返してくれます。

ただ静かにいらっしやるだけです。イエスの心が私のうちにあり、私の心も彼のうちにあります。何かかがやかしいものがあるわけでもなく、神秘的なものがあるわけでもありません。何かすごい感情があるわけでもなく、無言だけです。

私は祈りを唱えましたよと言うつもりもありませんし、ロザリオを唱えたり、詩篇を朗読したりとか、何かを成し遂げることもありません。私はただイエスと共に、そこにいるだけなのです。私は彼と共にそこにいたいこと自体が好きなのです。楽しいのです。

それはすべて、とてもシンプルで、優しく、そして安らぎを与えてくれるものです。

他の時、つまり安らぎを感じない時、私は孤独を感じ、心の中の空虚さを感じるのです。

何もやることなく、ただそこに座って待つというのは、容易ではありません。

何を待つのでしょうか。私にはわかりません。すると私の祈りは、小さな叫びとなります。

聖書の最後のみ言葉である「主イエスよ、来てください」は(黙示録 22章 20節) 私自身のものとなるのです。それは最後の出会いを求める叫びではなく、単に孤独の叫びであり、空虚さの叫びなのです。平和の時を待っているのであり、イエスを待っているのです。

もし私が「主イエスよ、来てください。平和の時よ、来てください」と何度も何度も繰り返すことができるなら、その叫びは実際に存在するものとなります。

私は、実際の生活から、私のエネルギーの無さから、私の弱さから出て来る新しい祈り方を見出しつつあります。

私は人々と出会い、そして彼らから話しを聞くのが好きです。

しかしながら私の目と耳は、まだそれほど純真ではありません。良くない点や傷ついた人間性を見ずに、また私の目や耳に丸太がある時に裁くことなく(マタイ福音書 7章 1節～)

他人の中に、まず彼らの美しさを見つけるほど、純真ではないのです。

私は、他の人たち一人ひとりの、心の中に、神の存在を認められるような、思いやりのある優しい目と耳を持ちたいと思っています。

私の目と耳が変えられるには、まだまだとてつもなく長い道のりであります。

それは、イエスのみができることです。勿論、私自身も、イエスによる変容の業を手伝う努力を、ある程度しなくてはなりません。

傷つきやすい人たちと共に、共同体の家で生きることを私は喜んでいきます。

彼らはラルシュに来る前、長年にわたって苦しみ、孤独で、拒絶されていたのです。

彼らの弱さや叫びは、私のこの生活を魅力あるものにしてくれるのです。彼らは神にとって貴いと私は信じているからです。

彼らは、私が静かに、そして平安に神と共にいられるように、とても助けになっています。私の人生が終わりに近づくにしがって、私は益々、貧しくて弱い、そして傷つきやすい人たちには神がおられるということを見つけています。彼らは私を変えてくれました。今、私は段々、弱くなっています。イエスはパウロに、「私の弱さは、あなたの弱さを通してあらわされている」と言っていなかったでしょうか。

ですから私が何か行うからでもなく、また私が何か行ったからでもない、しかし御父の子として、私が私であるが故に私もまた、神にとって貴いものであることを、私は発見することでしょう。

今日の私の祈りは、路上生活していたり、施設に閉じ込められたり、あるいは孤独になっている世界中の障害を持つ多くの、多くの人たちが、そして彼らの親御さんたちが、ラルシュや「信仰と光」共同体、あるいは他の形の共同体を見つけられますように、です。大勢の人たちが深い痛みや苦悩のうちにあり、彼らはこの美しさや価値、そして世の中に自分の居場所を見つけるための手助けをしてくれる共同体を待ち望んでいます。

皆様お一人おひとりに私の愛を。

ジャン・バニエ